

あの夏、オナラ轟いた頃

河上美智子

私は国立市の生まれの育ちで、実家は今でもそこにある。近くの第四小学校へ行っていた。当時私は三年生。小学校の回りにはまだ空地があつて、東隣りは雑木林だった。春になるとキンランが咲いた。キンボウゲはいくらでもあつた。たまに一度キンランを見たこともあつた。キンランは当時でも珍しかった。

学校の帰り道を、よく近くに住む緑川一美君と一緒に帰った。緑川君の家は、私の家へ向かう途中にあつたので、よく話しながら、一緒に帰ったものだ。まだ空地があつて、家が建つ前だったので、草地でいわゆるビンボウグサと呼ばれる花が咲いていた。そこで緑川君はたまに立ち止まり、立ち小便をしたりしていた。彼がおしっこしている間も、隣りで「ふーん、緑川君のオチンチンで、そんなのかあ」とか、他愛なく言ったりしながら話していて、そしておしっこが終わると、また歩き出して帰っていた。

この緑川君とは家が近いせいで、よくお互いの家を行き来しては、それぞれの家で勉強会をしていた。私の家へ来た時は、八畳間のテーブルで勉強していたし、緑川君の家でする時は、やはり八畳間くらいの大きさの部署に、卓袱台をはさんですわり、勉強していた。よくしていたのは、漢字の書き取り練習だった。宿題だったのかもわからない。

あれは六月頃だったろうか。夏だったと思う。私が緑川君の家へ行つて、漢字の書き取り練習をすることになっていた。一緒に帰り、緑川君と約束したので、私はランドセルを置くと、筆箱、下敷き、ドリルにノートとか取り出しては、手提げに入れて、また来た道に戻った。玄関で「緑川君」と大きな声で呼ぶと、本人やお母さんが出て来て、いつも通りの八畳間だったろうか、私室へ通されて、庭際に置かれた卓袱台をはさんですわった。そして黙々と二人は漢字の書き取り練習をしていた。

どのくらいいたたつたろうか。もうすぐ終了という頃だったと思う。やおらお腹が張つて来るのを感じた。どうしたんだろうと、自分でも不思議だったが、とにかくお腹の中は、段々苦しくなつて来る。ガスが充満していて苦しくて仕方ない。

こうなると気になって仕方なく、とても漢字の書き取りなんて、どうでもいい。何とかしないと、何とかしないと焦るが、意に反してお腹のガスは、ますます膨らんで、もはや爆発寸前だ。ふとふり返ると、和室の向こうに廊下があつて、トイレがある。しかし今なら、ちよつとおトイレ貸してとか言えるが、当時はまだ幼くて、そんなことすら、気がつかない。ひたすら必死にこらえて、心の中で、「出ちやう、出ちやう、オナラが出ちやう。どうしよう、緑川君にオナラの音、聞かれちやう」とただ困惑した。

しかし遂にその時は来た。「プー」とかいう、可愛い音ではなく、とても八歳の女の子が出したと思えない。「ブーツ」もいいところで、「ポッカーン！」みたいなお尻の穴という火山大噴火みたいな、ものすごい爆音が、静かな和室いっぱい轟き渡った。よく亡くなった父が出すオナラは、こういうのがあったと思う。というか、大体どこの家でも、お父さんのオナラは結構音が大きいらしい。しかしこの時の私のは、大人の男のそれにも劣らない大爆音で、ちょっと女の子で、しかも年齢を考えると信じられないようなシロモノだった。しいて言えば、さすがお父さんの娘。血は争えないといったところか。

オナラの瞬間、私はとっさに「誰だ」と言ってしまった。どうしても女の子なので恥ずかしくて、私が出したと思われなくなかったのだ。今思うと、多少恥しくても、「あつ、ごめんね。オナラ出ちゃった」とか、正直に言っても、別に大したことではなかったと思う。しかし結構神経質な性格をしていて、すごく気にしてしまい、とにかく何が何でも、私と思われたくないから、ひたすら隠せという気持ちでいっぱいだった。「誰だ」と言っても、二人しかない部屋で、緑川君がしなければ私に決まっている。一瞬緑川君が、「あれっ」といった感じで、顔を起こした。「まずい！ バレたか」とヒヤリとしたが、隣室では、お母さんや兄弟が談笑していて、時折笑い声が聞こえていた。「あつちかなあ」そう言って、後ろをふり返ってくれたが、直後に私の背後へ回り、正座していた私のお尻のあたりの匂いをかいだ。

しかし、よく音の大きいオナラは完全燃焼して出ているので、匂いはないと言われるように、私のも匂いは残っておらず、緑川君は「ふーん」と言って、臭くなかったのか、また席に戻ったが、きつと内心私がオナラしたのは、気づいていたとは思う。この時、とうとう一言も謝れず、また緑川君も、私のオナラについてはふれなかった。その後も黙々と書き続けて、じきに終るや否や終わったからと、帰って来てしまった。

きつと緑川君、「山本って、大きいオナラする女の子だなあ」とか、思っているんだろうなと、何であの時、よりによって、オナラしたくなったりしたのだろうと、運命を呪った。

翌日の登校を考えると、頭が痛い。教室へ入った途端、クラスメートの視線が、一斉にこちらへ向かいはしないか、緑川君が先に登校していて、クラスで昨日の私の悲劇をクラスメートに、ペラペラと吹聴して回っていやしないかと、もう嫌な予感で、気分はブルーどころか濃紺だ。いや真つ黒だ。しかし陽は沈み、陽は昇り、嫌でも翌日になった。とりあえず登校はした。教室へ入る瞬間、少々度胸は要ったが、入ってみると、何てことはない。いつもと変わらないクラスメートがいた。誰からも何も言われなかったし、緑川君も至って普通だ。私はこの時、緑川君で、なんて紳士なのだろうと思った。女の子に恥をかかせまいとしてくれて、なんて小さな紳士なのかしらと感心した。

こうして時は過ぎ、五年になり、六年になった。私の中で気まずさが残っていて、どうしても勉強会をしようと言い出せなかったし、これきり緑川君と一緒に帰ることもなかった。緑川君も私に何も言い出さなかったが、何かひどい引け目を感じていて、とても緑川君になんて、私からは言い出せない。勉強会は途絶えてしまい、私達の間に、渡るに渡れない溝が出来てしまった。あの一発の爆音を、本当に呪う。

そして卒業式を迎えた。私の中でいつか緑川君に謝りたい。「あの時はごめんね」と、素直に言いたいと、常々思い続けて、そのチャンスを待った。卒業式の後には、「どうしよう、言おうか、いつ言い出そうか」と、様子を伺ったが、どうしていいかわからない。なかなかきっかけが捕えられない。結局言えずにいた。

そしてお互いに同じ第二中学校へ入学した。密かに秀才の男の子に恋して、テニス部員として三年間過ごし、いつも球拾いだだったが、レギュラー選手の生徒の打った球を追って、その秀才のいるハンドボール部で、走る彼の姿を横目に見ながら、さながら私の心の窓辺に咲いた、赤いスイートピーの歌のような、淡いパステルカラーな乙女チックな三年間は、あつという間に過ぎ、ここも卒業した。

高校は別々の学校へ進学し、もう緑川君に会うこともなかった。それでも毎年初夏は来る。突然思い立って、緑川君を久しぶりに訪問し、「お久しぶりです。どうしてるかと思つて来ました」とか言つて、突撃してみようかと思つたりしたが、それもなんだかおかしいと、実行に至れずに終った。

高校卒業後、都内の英会話の専門学校へ入学した。緑川君のことも、オナラの一件も、あまり思い出さなくなって久しくなった。クラスメートは、年齢がバラバラ、私が一番年下だったが、一人、育ちの悪い、家庭に問題のあるようすの子が、一歳上の男の子にいた。たまたまクラスメートで、よく集まっては話したりしていたが、私は個性が強いタイプな女の子なのを、妙に変がられて、段々いじめにあうようになった。この男の子が主犯格で、口はきつくて、言うことがたちが悪い。

言葉の暴力は、私を打ちのめした。涙はとめどなく流れて、なんだか私は可哀想だが、可愛く自分で思えた。こぼれる涙は純粹な私の心の雫で、清くないわけがない。まだ十代で、中国人の女の子のように、二つに分けて三つ編の髪を左右に頭の上でおだんごにして、当時流行った、小さい苺やりんごの果物のついたヘアピンを飾っていて、その頭をうなだれて、シクシク泣いた。細いうなじを、誰が見てくれるでもない。泣いてる細いうなじを、この時誰か男の人で、私に同情してくれる人でもいたら、背後から、抱きしめてほしかった。しかし運悪く、そんな気の利く奴は、一人もない。ただただ本当に悲しかった。一対多数で、寄つてたかつて、女の子を叩きのめして平気にいるのが、何とも紳士的でない

気がして、何て乱暴者で、下品な人達なのかしらと思えた。育ちの悪さがしのばれた。はいている靴が涙だらけ。あまり見た目も良い感じがしない。

一年は瞬く間に過ぎて、元々おっとりしていた私が、おっとりして、その連中に出し抜かれていた間に、次の夏が近づいた。吹く風に新緑の葉の匂いが混じるのを感じる。青臭い匂いのする風だ。私はこれが初夏の風だと思う。傷ついてしまった私が、こうと云って面白味もない日々を過ごすうちに、めぐり逢った嫌な男の子によって、紳士的な人って、なかなかいないなあと思いつながら、国立駅の改札を抜けて、雑踏の中を歩いていくうちに、そういえば、緑川君で、紳士的な人だったなあ、彼はどうしているだろうと、ふと頭をよぎった。この季節だったと、遠い恥ずかしい記憶がよみがえる。緑川君で、どんなお兄ちゃんになったろうかと思うものの、何か現在の冴えない自分が恥しくて、きつと今頃、それなりに立派になつてゐるだろう緑川君とは、何かすごく差がついてしまった気がして、遠く眩しく思えた。今の私はとてもお目にかかれないうらい、恥しい存在だ。思えば同級生とはいえ、同じような感じだったのはあの頃で、今は随分違ってしまったと己れを恥じた。初夏の青い匂いのする風に吹かれて、折れそうに華奢に痩せた体で、線路沿いの住宅地の道をとった。

肌だけは色白できれいな私が恋しても、いつも片想いであえなく終り、本当に残念なことに、誰も私に恋してくれなかった。牡羊座の女で情熱家の私が、まさしく愛と情熱と勇氣の星の女にふさわしく、好きになったら、とことん想い続けるあまりに、今風に言うなら、元祖肉食系女子の私は、女でも、自分から相手に告白して迫り、そして見事に振り倒される。例えば神風突撃して、すべて見事に玉砕した。振り方も、どなたさんも、お世辞にも紳士的とは言えない。もろに自分を好きになってくれた女の子に、赤っ恥かかせるような振り方だ。余程私は女のうちにに入れてもらえないのだろう。

夕方になると、よく涙がこぼれた。泣きながら、夕焼けに染まる道を家路についた。泣けて、泣けて仕方なかった。夜の帳は嫌い。怖くさえあった。夕方、豆腐屋の自転車、カタカタと音をさせてすれ違う。トーフー、トーフーと、ラツパを吹く。そのせつないトーフーが、私の胸に迫る。何とも悲しく響く。ひょっとして、今すれ違った豆腐屋さんも、本当はとても悲しいのかしら。泣きそうな思いの表れなのかしらと、遠のくラツパのものを悲しい響きに、思いをさせた。人の足の歩調が速く感じて、帰りゆく人々が皆幸せに見えて、きつと暖かい家庭で、暖かい夕食が待っているのだらうと、道ゆく人が、皆羨ましかった。私とて母が作る夕食はあるのはわかっているのに、なぜ、こんなに悲しいのだらうと、涙が次から次へと溢れるのを、時折手の甲でぬぐいながら、通い慣れた道を歩く日々だった。あまり満ち足りてもいかなかった青春は過ぎていった。

救いの神は本当にいる。こんな私も主人とめぐり逢い、結婚出来て、二人の可愛い子供

にも恵まれた。どれだけ辛かったか、とても語れない精神的な労苦に耐えて、若い頃趣味だったヨーロッパ刺繍を再び始め、作りためた作品を基に、ギャラリーを借りて個展を開くと、幸いに好調で地元紙が取材してくれて、大きく載せてもらい、それを見たと言つて、埼玉の地方FMラジオ局が、うちの番組に出て頼んで来て、生まれて初めてラジオに出演して、刺繍について語れる機会を得た。中年にさしかかり、やっと運が向いて来たと思えた時、中学の同級生から連絡が来て、同窓会の知らせをもらった。

懐かしさがこみ上げて、とにかく皆に会いたいと、出席を申し込んだ。風の便りに、今は立派な警察官になったと伝え聞いた緑川君は来るだろうか。もしも緑川君が来たら、今度こそ誤まって言おう。緑川君で紳士だねと。

やがてその日は来たが、緑川君は来なかった。私は少しがっかりした。しかしそれにも増して、懐かしい貌で溢れている。同級生は有り難い。一瞬にして、少年少女に戻れる。無傷だった頃に、純粹に戻る。楽しい時間は過ぎていった。

あれから、早や二年たつ。青い匂いのする風が、今年も吹く季節になった。近所の家の玄関前の軒に、ツバメが巣を作っていて、最近前を過ぎたら、ポーチの上に、灰色の土が落ちて散らばっていた。きつとツバメがもういるのだろう。酒屋へビールを買いに行くと、いろいろなメーカーの梅酒を置いている。

夏が近いのを感じずにいられない。初夏が、そう思うとよみがえる記憶がある。忘れられない友がいる。淡い傷が、心を刺すが、そう嫌な痛みではない。じきに街中の至る所で青紫の紫陽花が咲き出すだろう。百合も香るだろう。もう、おばさんになった私に、今年も夏がめぐり来る。